

トとヘマタイトとの中間体に属する不安定な状態のものであると判断しても概ね差支えないものと思われる。また 10min 還元後の試料に、ヘマタイトがマグнетタイトの離溶組織として現出することに対しても、不安定ヘマタイトまたはマグヘマイトがマグネットタイトへ転換し、一部の Fe_2O_3 を遊離するという、前記のごとき解釈が成立つものと考える。そして還元時膨脹は、このヘマタイトのマグネットタイトへの転換と、一部のヘマタイトの離溶特に後者の方に大きな関係を持つものと考えるのである。すなわち、ヘマタイトのマグネットタイトへの転換により、結晶粒界の結合は弱まり、更にヘマタイトの離溶によりほとんど粒子間の結合は断ち切られると考えられる。更にいろいろの物理的な力、例えば熱膨脹の差などが加われば構成粒子が動き見掛け上の膨脹を起こすものではないかと思われる。因みに熱膨脹率はヘマタイト： $7.6 \sim 8.3 \times 10^{-6}$ 、マグネットタイト： 9.54×10^{-5} でマグネットタイトの方がはるかに大きい。

還元時膨脹の原因をこのように考えると、某社製ペレットの還元時の膨脅については下記のように比較的容易に説明することができる。

1. 高温での再焼成により、膨脅を起さなくなるのは、不安定なヘマタイトが安定なヘマタイトに転ずるためであろう。

2. 還元時膨脅が急速還元の場合に起き易く、緩速の場合に起き難いのは、急速加熱によりマグネットタイトへの転換とヘマタイトの離溶が急速に起こり、それにつれて物理的な力の影響が急激に現われるためと解釈できる。

3. ペレット原料にシリカ分を添加すると、スラグの結合が生成されるので上記の粒子間結合が弱まつても、スラグによる結合が崩壊を防止する。

4. 四三酸化鉄試薬を焼成したもので膨脅の起きたのは、この試薬が問題となつた、ペレット同様、極めて不安定な状態のものであるためである。

5. 水素によつては膨脅が起らぬことに対する説明資料は今のところ不足であるが、水素の還元力が強いため、前記の現象の起る以前に還元が進行するのではないかという推定は可能である。

4. 緒 言

以上顕微鏡観察結果をもとに、某社製ペレットの還元時膨脅現象を考察したが、現段階では資料も充分とはいえないでの、推測の範囲を出ないが、今後の研究により充分な裏付けを行ない得るものと考える。

文 献

- 1) J. W. MELLOR: Inorganic and Theoretical Chemistry

ペレットの品質におよぼす焼成条件の影響

国井和扶*・○西田礼次郎*・鎌田靖男*

原田久光**・勝間田嘉和**・野々村武**・淡路光宏**

The Effect of Induration Condition on the Quality of Various Iron Pellets.

Kazuo KUNII, Reijiro NISHIDA, Yasuo KAMATA, Hisamitsu HARADA,

Yoshikazu KATSUMATA, Takeshi NONOMURA and Mitsuhiro AWAJI

1. 緒 言

ペレットの高炉への使用についてはかなり以前から行なわれており、その製造方法と成品特性の関係についても 2, 3 の報告^{1,2)}がみられるが、いずれも焼成温度が低い場合で、焼成温度の高い場合は明確でない。

ヘマタイト系の鉱石を主原料としてペレットを製造する場合にはかなり高温で焼成する必要があるといわれているので $1250 \sim 1350^{\circ}\text{C}$ を主体にした比較的高温における焼成をとりあげ成品特性との関係を調べた。

本報告ではまず基礎的な研究として電気炉と焼成炉による焼成試験を実施し、焼成温度とペレットの成品特性との関係を調べとくにヘマタイト系の原料の場合には高温焼成が品質向上に効果のあることを認め、次いでグレートキルン式のペレット試験工場（能力 20 t/day）にお

いてヘマタイト系の原料を含めて各種のものについて高温焼成操業を行ない、ヘマタイト系原料のみでも高炉用ペレットを製造することができることを確認した。

2. 基礎的研究結果およびその考察

2.1 Fe_2O_3 ブリケット試験

通常の鉄鉱石には不純物として SiO_2 , Al_2O_3 , CaO などの脈石成分を含有しているのでこれらの影響を除くため Fe_2O_3 試薬を原料として使用した。

原料の粒度は -44μ が 57.95% である。このように試薬を原料としたので大量に使用することができないためペレットの代りにブリケットで代用した。

* 株式会社神戸製鋼所中央研究所

** 株式会社神戸製鋼所神戸工場

生ブリケットは1個2gの原料に約15%の水分を添加し、径10mmのダイスを用い約300kg/30minの荷重速度で成型した。したがつて生ブリケットは径が10mm、高さが9mmの均一な円筒形である。

焼成は大気雰囲気下で980°Cまで17.8°C/min、いつたん980°Cで10min保持したのち、8.5°C/minの速度で上昇せしめた。

所定の温度に到達後は予定した時間保持し、以後は炉中から取り出し大気中で冷却した。

Fig. 1の試験結果によれば圧潰強度は焼成温度が1350°Cまでは温度の上昇、時間の延長とともに上昇する。しかし1400°C以上では逆に温度の上昇、時間の延長とともに低下する。この結果からペレットの圧潰強度を最高にするためには1350°Cで、ある時間(この場合23min)以上焼成する必要があることが判った。

次に強度と密接な関係にあると予想される気孔率と焼成条件の関係を調べたところFig. 2に示すとおり、Fig. 1とまつたく逆の傾向を示した。

さらにFig. 3に示すように1350°Cまでの試料の気孔率と圧潰強度の間には高度の逆相関が認められた。

また各ブリケットの顕微鏡組織の観察結果によれば焼成温度の上昇、焼成時間の延長とともに空隙の減少がみられ、同時にヘマタイト粒子間の結合が進行する。1400°C以上ではマグネタイトの発生が認められた。

2.2 鉱石ペレット試験

次に脈石を含む実際の鉱石としてアフリカ、硫酸滓、ララップ、ゴアCおよびテマンガン鉱石を選びパン型ペレタイザーによつて径15~17mm程度の生ボールを作り電気炉によつてブリケットの場合と同じ速度で昇温し1150~1450°Cの間で焼成した。焼成後のペレットの径は14~16mmの範囲である。

試験結果をFig. 4に示したがいずれの原料鉱石においても前述のブリケットと同様、焼成温度が上昇するに

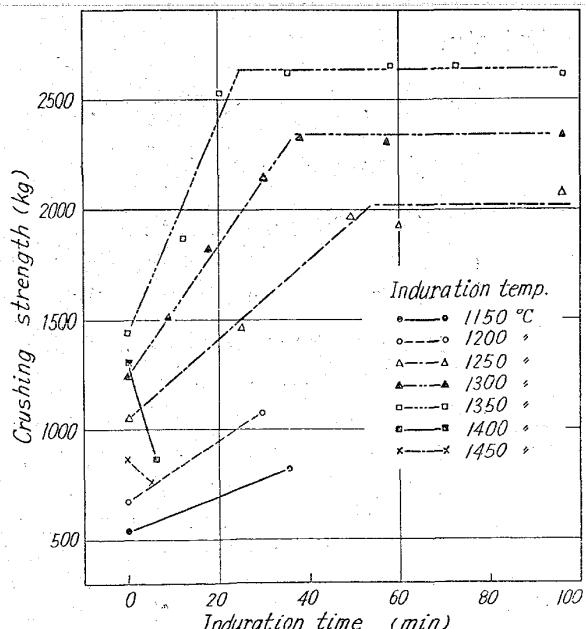


Fig. 1. Relation between crushing strength and induration time.

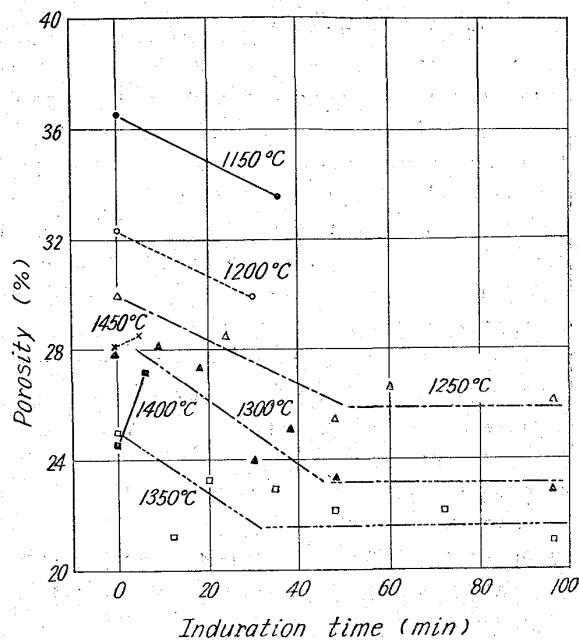


Fig. 2. Relation between porosity and induration time.

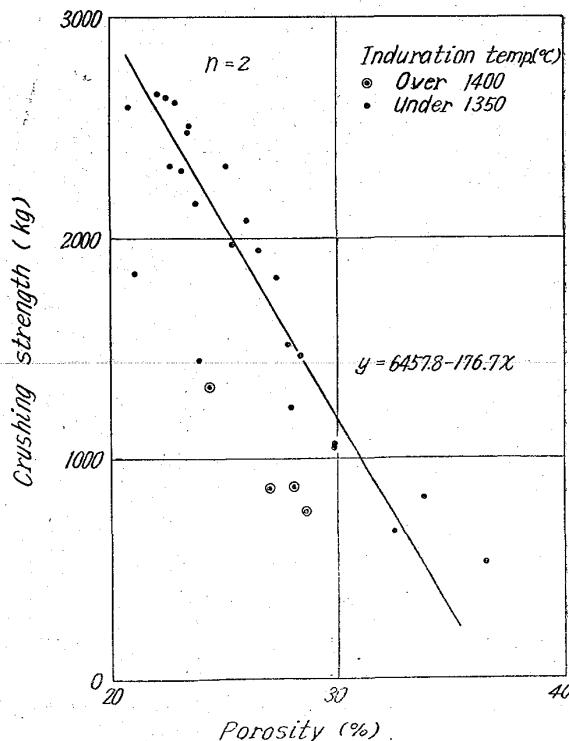


Fig. 3. Relation between crushing strength and porosity.

したがい圧潰強度は増加し1350°Cで最高に達する。しかし1400°C以上になると、焼成温度が上がれば逆に圧潰強度が低下することを確認した。

また原料がヘマタイトの場合には焼成温度の影響が大きく、マグネタイトの場合にはその影響が少ないが、これはヘマタイトでは焼成によつてボールが収縮すると同時に各鉱粒が接触点において結合する。この現象は温度

Table 1. Properties of raw material and product.

Remarks	Properties of raw material						Properties of product									
	Chemical composition (%)					Indura- tion temp. (°C)	Dia (mm)	Crushing strength (kg/ball)	Porosity (%)	FeO (%)	Compression-Reduction test					
	T.Fe	FeO	SiO ₂	Al ₂ O ₃	CaO						>10	10~ 1·2	<1·2			
Africa	64·42	0·41	3·70	1·59	<0·10	89·6	1200	18·4	260	14·4	0·17	94·1	5·5	0·4	37·5	12·6
							1350	17·3	827	9·6	0·26	99·9	0	0·1	34·0	7·5
Goa-C	54·63	1·17	5·58	8·57	<0·10	94·8	1200	15·8	96	23·7	0·13	72·7	22·1	5·2	54·6	17·3
							1350	15·5	398	15·5	0·26	99·2	0·2	0·4	50·6	11·7
Brazil*	66·73	0·80	2·00	0·48	tr	97·6	1200	12·6	69	18·5	0·16	93·7	4·6	1·5	45·4	29·0
							1350	12·5	184	14·3	0·18	94·2	5·2	0·6	43·8	5·5

* ベントナイト 1% 添加

** 還元後ペレットはかなり粘着性をおびて、数個づつつき合っていた。

Table 2. Properties of raw materials.

Remarks	Kind of raw materials	Chemical composition (%)					Particle size (-44 μ %)
		T.Fe	FeO	SiO ₂	Al ₂ O ₃	CaO	
Jedway	Jedway	61·77	25·48	5·81	1·13	4·36	64·3
Mozan	Mozan	59·60	23·32	15·54	0·48	0·76	59·0
J.R.G.	Jedway 1/3, Rompin 1/3, Goa SK 1/3	62·69	10·80	3·58	2·07	1·49	64·3
B.R.G.	Brazil 1/3, Rompin 1/3, Goa SK 1/3	64·90	2·50	1·88	2·01	0·10	51·7
MX-7	Goa SK 40%, Brazil 20%, Rompin 10% Sannicolas 15%, Ironstone 15%	62·94	7·57	2·89	2·19	0·37	51·7

Table 3. Results of test operations.

Re- marks	Indu- ration temp. (°C)	Dia (mm)	Cru- shing stren- gth (kg)	Poro- sity (%)	FeO (%)	Tumbling test of products. (mm)	Reduction test (GAKUSHIN)		Compression-Reduction test ⁽³⁾						
							+0·5	+5	Redu- ction ratio (%)	Tumbling test after Rd test (mm)	Particle size after Rd test (mm)	Reduc- tion ratio (%)	Shrin- kage ratio (%)		
Jedway	1265	13·9	596	20·39	2·30	97·4	97·0	75·7	98·96	98·84	95·1	4·4	0·5	57·2	6·7
	1300	13·8	696	17·64	1·95	98·2	98·0	73·9	99·28	99·20	97·8	1·8	0·4	40·8	3·1
Mozan	1300	13·8	390	15·91	0·90	97·7	97·9	62·2	98·83	98·97	99·9	0·1	tr	61·3	7·2
J.R.G.	1350	13·4	478	13·21	0·37	98·8	98·4	74·4	98·81	98·99	94·7	4·9	0·4	35·3	6·9
B.R.G-1	1330	14·0	231	22·74	0·87	94·3	92·5	63·2	98·40	98·32	93·5	5·7	0·8	52·7	13·0
	1360	14·4	285	21·75	1·16	94·6	93·7	60·3	98·96	98·84	94·1	4·8	1·1	47·8	11·0
B.R.G-2*	1335	14·6	323	20·82	1·04	94·4	93·8	73·4	98·80	98·76	95·6	3·9	0·5	64·6	7·0
	1350	14·5	356	18·97	0·96	94·3	94·0	72·8	99·12	99·24	95·8	3·7	0·5	48·0	7·5
MX-7	1350	14·8	377	17·72	1·58	97·2	96·8	76·6	99·23	99·38	94·4	5·1	0·5	51·5	6·4
Marcona	—	14·2	212	27·10	0·09	93·4	93·2	80·7	84·72	83·68	90·5	6·7	2·8	52·4	15·4
Erie	—	11·3 ~13·0 ~288	156 ~288	18·76	0·27	92·1 ~97·3	—	83·4 ~74·2	98·28 ~99·24	88·8 ~90·0	10·8 ~9·0	0·4 ~0·5	50·8 ~47·3 ~5·4	7·2 ~7·0	

* Using a auxiliary burner.

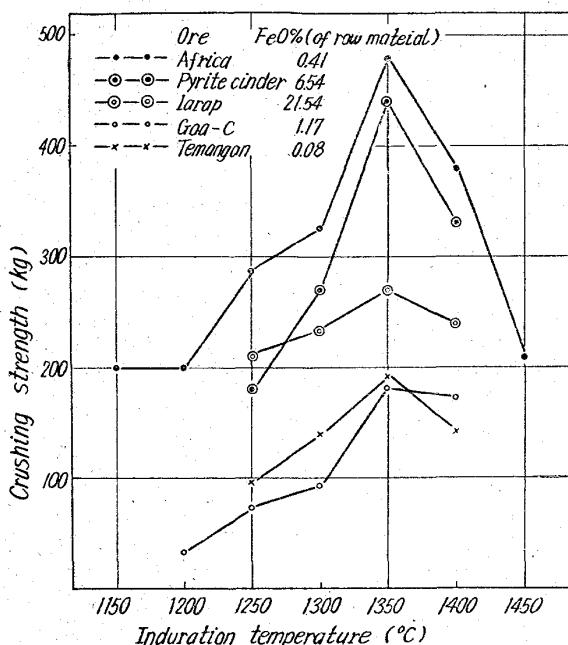


Fig. 4. Effect of induration temp. on crushing strength.

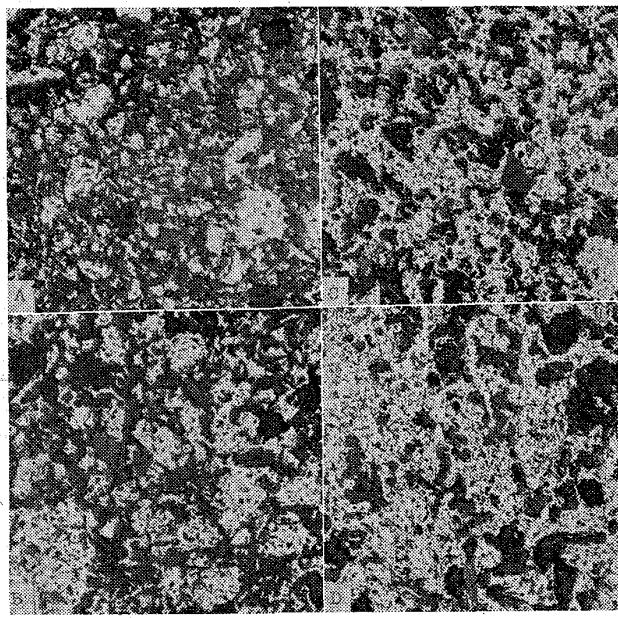


Photo. 1. Microstructure of goan pellet.
A: 1200 B: 1250 C: 1300 D: 1350
×100 (1/2)

の上昇とともに活発になるのみであるに反し、マグネタイトの場合は焼成中にマグネタイトがヘマタイトに再結晶する際に強固な結合³⁾ができるためである。

Photo. 1 に一例としてゴアCペレットの焼成温度と顕微鏡組織の関係を示したが、焼成温度が上昇するにしたがい空隙は減少し Fe_2O_3 粒子も収縮し、緻密となりその後、隣接の粒子同志が接触、結合、成長し Fe_2O_3 粒子の強固な網状組織を形成する。脈石部分も低温ではほとんど反応していないが高温になるにしたがいスラグ化し酸化鉄粒子と結合していくようである。

2.3 焼成炉による試験

電気炉による焼成試験においては圧潰強度の高い緻密なペレットの製造条件が判明したので次に3種類のヘマタイト鉱を対象として2)と同様パン型ペレタイザーで生ボールを作り、次に 20kg/charge の焼成炉によつて焼成した。焼成は C_3H_8 と O_2 を用い完全燃焼するように注意しながら、1000°Cまで 16°C/min、以後目標温度までは 18°C/min で上昇せしめ、到達後は 1200°C の場合は 40min、1350°C の場合は 10min 保持する。冷却は燃焼を停め空気を吸引して行なつた。

成品ペレットは圧潰強度の測定のみならず、圧縮一還試験⁴⁾も行なつた。

Table 1 に使用原料の化学成分、粒度および試験結果を示した。

焼成温度が 1200°C の場合、圧潰強度は低く、圧縮率と還元後ペレットの破壊度合は高く、この値では概して高炉での使用は望ましいものではないと予想している。

これに反し焼成温度を 1350°C まで上昇せしめると圧潰強度は高くなり、収縮率と還元後試料の破壊度合も低くなる。一方還元率は若干低下し、その上焼成後ペレットの FeO 含有量もわずか増加するが、高炉での使用に堪えるものと考えられる。

3. 試験工場における操業結果

以上の基礎試験結果からヘマタイトを含む各種の鉱石を原料として高炉用ペレットを製造しうる見通しを得たので試験工場で操業試験を行なつた。

対象とした原料は Table 2 に示したようにマグネタイトからヘマタイトまでの広範囲にわたつている。いづれの場合もベントナイトを 0.5% 添加した。

試験に当つては各原料とも粉碎一脱水一造粒一焼成と一貫した操業を約 2 昼夜続けた。

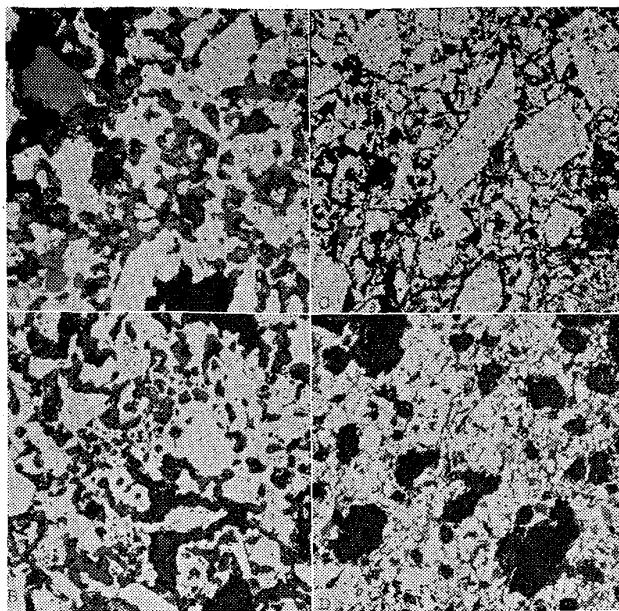
これらの試験結果を Table 3 に示す。なお当所で入手した Marcona と Erie ペレットの試験値も参考のため表示した。また Jedway と B·R·G ペレットでは焼成条件を変化せしめその影響を調べた。

Table 3 の試験結果から B·R·G-1 ペレットを除けば圧潰強度、FeO、成品の回転強度、還元試験(学振法)後の試料の回転強度、圧縮一還元試験における還元率、試験後試料の粒度分布および圧縮率などは、参考値として示した Marcona、Erie ペレットと同等か、またはそれ以上の値が得られた。ここで B·R·G-1 ペレットは補助バーナーを使用していないため熱量不足となり、十分焼成されなかつたためで、同一原料の補助バーナーを使用した B·R·G-2 ペレットはこれに比べ各特性値とも向上を示している。

Photo. 2 にヘマタイトを主原料とする 4種類のペレットの顕微鏡組織を示したが、いづれも良好な結合状態を示している。

このようにマグネタイトから多少褐鐵鉱を含有するといわれる南方系赤鉄鉱まで、いかなる鉱石においても適当な操業条件を見出せば高炉用ペレットが得られることが判明した。

なお、この試験操業においても焼成温度の影響を調べるために 2、3 の実験を行なつたが Table 3 に見られ



A: BRG-1, B: BRG-2, C: MX-7, D: J.R.G
Photo. 2. Microstructure of various pellet.
× 100 (1/2)

るよう焼成温度の上昇によって圧潰強度は上昇し、空隙率と両還元試験における還元率などは低下している。

還元試験（学振法）と圧縮一還元試験における還元率は、ペレットによりかなり傾向が異なっている。これは還元ガスは同じであるが温度、還元時間が異なり前者が

温度は 900°C 一定で 3hr、後者は 2 kg/cm² の荷重を掛けながら 200°C から 1000°C まで 16min かけて昇温しているためである。

このように還元方法によりその傾向が異なつてくるので高炉装入物の評価方法としての還元試験法を確立するには今後かなりの検討が必要となる。

しかしながら以上の試験結果からマグネタイトから全ヘマタイト原料まで、いずれの原料においても焼成条件さえ注意すれば優良なペレットが製造されることがわかる。

4. 結 言

ペレットの製造試験として電気炉による Fe₂O₃ のブリケットの焼成試験より、グレートキルン式試験工場 (20 t/day) の試験にわたり一貫した試験を行ない、あらゆる原料鉱石、特に全ヘマタイト原料についても焼成条件を注意すれば、工場規模で優良なペレットを製造しうることが判明した。

文 献

- 1) 佐々木、岸高、春、小笠原：鉄と鋼，50(1964), 3, p. 325~327
- 2) 森永、池野、岩崎：鉄と鋼，50 (1964), 5, p. 743~752
- 3) 神戸製鋼所提出(高尾善一郎)：学術振興会第54委員会報告, No. 667
- 4) COOKE and BAND: Trans AIME 193 (1952)
p. 1223~1230

鉄鉱石、焼結鉱、ペレットの膨脹、荷重軟化

および粉化について

渡辺 正次郎*・○大竹 康元*

Thermal Expansion, Softening and Degradation Behaviours of Ore, Sinter and Pellet.

Dr. Shōjiro WATANABE and Yasumoto ŌTAKE

軟化試験は 1 kg/cm², 2 kg/cm² および 5 kg/cm² の荷重下の膨脹および収縮を測定し膨脹曲線および軟化曲線を求めた。

試料は 10~15 mm 粒度のもの 500 g (焼結鉱 300 g) を使用し常温より 300°C までは N₂ 5 l/min を流し 300°C より 1100°C までは、還元ガス (CO(30%) + N₂ (70%), 15 l/min) を使用した。

反応管は二重式で内部の内径 50 mm のステンレス反応管中の試料層高は 90~130 mm である。

高温における粉化性については Linder の回転還元試験装置を使用し、すでに報告の試験条件²⁾にて実施した。

* 住友金属工業株式会社中央技術研究所